

# EurekaXII

六年制通信 No.25 令和6年11月1日(金)号

## 見つけるのは伸ばすべき個性

先週号の続きみたいで恐縮ですが、小さい頃に藤井七冠と同じように将棋に触れても彼のように人と全く興味関心を示さずに終わる人がいるというのは、本当に不思議ですね。人間という生き物は複雑で、一日何も食venaかったら腹が減るといった本能に関する問題は誰にでも当てはまるから個性の出しようがないわけですが、本能以外の領域だと人によって千差万別の反応を示しますね。それを個性というのでしょうか。一見同じような反応をしているように見えても、自分と全く一致する感性を持った他人は一人もいないと言っていいでしょう。

私にも経験があります。大学時代にある講義を聴いていて、あの時わりと広い教室に百人はいたかな、結構私語があつてうるさかったのですが、私は夢中で聴いていました。面白くて仕方なかったのですね。昔のギリシアでは悲劇や喜劇の上演の時に、面白くないと観客が役者にトマトを投げつけたとか女性は全員眉毛を剃っていたとかそんな話だったのですが、ちょうどヘロドトスの『歴史』を読み始めていたこともあったのでしょう、とにかく時間を忘れるくらいワクワクしながら講義を聴いていたのです。ところが、講義のあと、先生の研究室を訪ねて読書指導をお願いしたのは私一人でした。同じ研究室の仲間でさえ私の行動を、そこまで面白かったかあ？くらいに思っているようでした。私はなぜ面白いと思わないのか不思議でしたが、向こうも私のことを不思議に思っていたわけですね、きっと。あの時私は自分の個性を自覚しました。あの講義に引き寄せられる個性を自分は持っているのだと。

面白いと思ったとしてもどの程度面白かったのかは人によって違いますから、自分の「面白い」センサーに従って判断するしかないと思います。この時、人の意見に左右されてはいけません。本当に面白いと思ったのか、興味が湧いたのか、もっと詳しく知りたいと思ったのか、そのあたり、自分を信じるしかないですね。人はどうあれ自分だけは楽しく感じる分野、それが君の個性が発揮できる場所です。やがてその興味関心を深めることが自分の仕事に繋がれば、こんな幸せなことはないでしょう。

昔、ある先生が言っていましたが、趣味と仕事はどう違うかと考えた時、時間をかければかけるほど面白く、そして飽きることのないのが仕事で趣味には一日にそう何時間もかけていられないと。あまり趣味に時間をかけていると、途中でこんなことをしていていいのだろうかと考えてしまうものだと、そう言うのです。なるほどその通りですね。将棋が趣味な人がいても藤井七冠のような熱心さを持って何時間も没頭できるとは思えませんから。若いうちに時間をかけるに値するものを見つけられるかど

うか。世の中に山のようにある物事のどれがそれに値するか、それを見つけるには君自身の個性をよく知ることが大切です。できれば知的な分野で魅了されてやまないものを見つけてほしいと思います。体力が衰えても楽しめますから。

時間をかけるというのは、決して大げさではなく命を懸けるということです。このことをよく理解しておかないといけません。人生 80 年とすると、最近はずっと長いかもしれませんが、 $24 \times 365 \times 80 = 700800$  で、およそ 70 万時間です。以前これを分や秒に直して示したことがありましたが覚えているでしょうか。これが私たちの命です。この大切な命のうち 100 時間を使って何を得るか、1000 時間を浪費してなお惜しくないものを持っているか、10000 時間と引き換えにして余りある興味関心を見つけることができるか、社会に出る前にすべきことはこれですね。

諸君の場合、未来を応援してくれるのも壁になるのも親御さんです。親は無条件に君たちの幸せを願っているのですから応援するのは当然です。しかし親御さんは大人であるがゆえに自分の経験はもちろん、見聞きしてきた他人の経験もたくさん知ってしまっています。ですから君の個性が生きる場所に不安を感じるのが普通です。子どもに苦勞をさせたくないという親心も、君たちには壁となる可能性があります。藤井七冠のような天才でも母親は高校中退に反対したと言われています。親の気持ちになれば、私も藤井さんの母親の心配はわかります。しかし、そんな母も最後は息子の背中を押しました。なぜか。もちろん圧倒的な息子の個性を理解したからですね。

#### 今週のおすすめ

・劉慈欣 『老神介護』 (角川文庫)

五作品からなる短篇集です。『老神介護』はその中の一編。劉さんは中国の SF 作家です。突如現れた宇宙船から次々に降り立った神は、みずばらしい姿で言った。「われらは神じゃ。この世界を創造した労に報いると思って、食べものを少し分けてくれんかのう」、これが文庫本の裏表紙の紹介文です。もう面白そうでしょ。最初の一行が「神はまた、秋生一家を怒らせた。」ですからね、何事かと思いますわな。いつも言いますが、作家の想像力というのはたいしたものですね。

神様と言えば、全知全能ではないのかしら。宇宙船に寿命が来ているとはどういうことか。そんなのすぐに修復できるでしょうが、神様なんだから。ま、しかし、うちに神様が来るなんて光栄以外の何物でもないわけですから、是非うちに、いやうちに、取り合いになって当然なわけ。しかしこの神様たち、仙人よろしくカスミを喰って生きるわけではなく、ちゃんと三食食べるんですね。老人ですからあまり働けないし。つまり生産する側ではなく消費する側なわけで、そのことに村人たちは気づいていき、各家庭で神様との衝突が、多くは口喧嘩が始まるわけ。中には「わかった出ていきゃいいんだろ」と言う神様がいたりして。しかし神様を追い出していけないという法律があるのです。さて、この揉め事、人類と神様はどうやって解決するのでしょうか。私、読んでいるうちは笑っていたのですが、最後笑えなかったな。

BGM は Boney M の *Sunny* でした…。